

## 「認知症患者とその家族のためのアート鑑賞プログラム」事業

米国で認められた認知症対応プログラムを日本に広げるため  
専門のエducatorを養成する

一般社団法人 Arts Alive (アーツアライブ) による美術鑑賞を媒介とした認知症対応プログラムが2年目の活動に入った。プログラムの実践者であるエドゥケーターの養成講座を開講し、10名の第一期生が修了。全国の美術館で同様のプログラムを誰もが受けられるように、という夢に向かってのスタートを切った。

認知症の方から自由な会話を  
引き出すエドゥケーターの腕前

2013年3月、上野の西洋美術館でアーツアライブが開催するACP (アートコミュニケーションプログラム) が行われた。美術鑑賞を媒介として、認知症の方と会話を行い、活力を取り戻すというプログラムである。エドゥケーターと呼ばれる講師が対象となる絵画の前に立ち、参加者たちは椅子や車椅子に座って絵を眺めている。講師といっても解説が主ではなく、参加者の発言を促すことが一番の役割だ。

参加者は認知症の方と、その家族や介護士たち。同伴者をつけることが原則になっている。実質的な介助や精

神的なサポートのためでもあるが、ここでの体験を一過性のもので終わらせるのではなく、普段の生活のなかで活かしてもらうためでもある。

昨年の社会貢献活動年間報告書でご紹介したように、このプログラムはニューヨーク近代美術館 (MoMA) が開発したもので、アーツアライブ代表理事の林容子さんがAJOSCの助成を受けてそのプログラムを日本に導入したものだ。

すでに各地の美術館で実践され、関係者からの評価も高い。この日の参加者からも「また参加したい」という意見がほとんどだった。なかには美術館にきたこと自体初めてで、絵について感想や意見を述べることなど自分には無理だと思っていたという人もいた。だが、実際に絵の前にするとクロード・モネの「舟遊び」について「服装と水面に描かれている影の色が違う」と、するどい意見も飛び出してきた。

それに対してエドゥケーターを務めた林さんは「すごいですね。言われてみればその通りです。私も気が付きませんでした。でも、どうして色を変えたんでしょうね」と、ほめると同時に次の発言を促す。ここがエドゥケーターの腕



エドゥケーターは参加者の発言を促し、会話をうまく引き出していく

上野の西洋美術館で開催したアートコミュニケーションプログラムの様子

の見せどころだ。肝心なことは会話をいかに引き出すかであり、それが仮に絵とかけ離れていてもかまわない。

最初は緊張してかあまり語らない参加者も、話しかけられるうちに徐々に打ち解け、発言するようになっていく。それと共に笑い声もでるようになっていた。同伴者たちも、「こんなにしゃべるのを初めて見ました」と驚くほどの効果である。

養成講座から初年度は  
10名のエドゥケーターが修了

プログラムの効果を実証した林さんは、「日本の全国の美術館で、誰もが同じプログラムを受けられるようにすることが夢です」という。

そのため2012年度、アーツアライブはエドゥケーター養成講座を開講した。講座は基礎コースが2時間×10回、実践コースが2時間×6回という内容になっている。基礎講座では、アートとの対話の仕方やプログラムの作成、認知症のケアなどを学ぶ。講師は林さんのほか、日本美術史学者の河野元昭・東京大学名誉教授や認知症介護指導者の池田久栄さんなどがあつた。



エドゥケーター養成講座を案内するプログラム



養成講座には、九州や長野など全国から11名の受講生が集まった

## 担当者より



実践プログラムとして、  
活用分野も  
広がっていきます。

一般社団法人 Arts Alive  
代表理事  
林容子さん

プログラムの船出をAJOSCに後押ししていただきましたことを心より感謝いたします。このプログラムは認知症のみならず、精神的なトラブルを抱えている方にも有効です。企業でも社員のケアなどに活用できますので、認知度アップにも務めたいと考えております。今後もご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

開講にあたり、林さんは美術史に関する知識に重きをおかなかった。

「それは後追いで学んでも身につけられます。それよりも熱意とコミュニケーション力を重視しました」と林さんは言う。

東京渋谷区にある教室で10月から始まった講座には、九州や長野など全国から11名の受講生が集まった。参加者の多くは、すでにこのプログラムを見学し効果を確認している人で、仕事で活用を考えている人や身内に認知症の方がいて必要に迫られている人などだ。

それだけに第一期生は熱心な人が多く、仕事の都合で今回は断念した人を除き10名が修了証を手にした。修了生の一人は次のように語っている。

「認知症の母とACPに参加し、普段控えめな母がルオーの絵を見ながら活発に意見を言う姿を見て受講を決意しました。その母は2月に亡くなりましたが、今後は他の皆様が美術を楽しんでいただくことをサポートしていきたいと思います」

第一期生はこれから、それぞれ地元でエドゥケーターとして活躍することになる。しかし、始まったばかりのシステムであり、認知度も低く講師のギャランティの設定などにも課題が残っている。林さんは「今後は目標である400名のエドゥケーターの輩出と共に、活動環境の整備に力を入れたい」と語ってくれた。